

<グループ 1 からの質問>

➤ 共感する仲間作り、人の動かし方はどうしたらいいのか。

⇒やっっていくうちに離れて行く人、動いて欲しくても動いてくれない人もいる。その中で、どうやって仲間作りをしてきたのか。

★松下氏

- ・ 最初に集まった人でも、期間が経つと違和感を持つ人も出てくる。何のためにこの活動をしていくのか、何度も話し合いを重ねて来ても去る人はいる。去る人は追わず。違和感を感じている人と一緒に歯車を回すことは難しい。
- ・ 一度外に出て行って戻ってきた人もいる。最終的にはその人が決めること。活動の目的を共有できない場合は、別々に活動をすればいい。ミッションでつながらない限り、仲間と山を乗り越えるのは難しい。

★村上氏

- ・ 自分と共感できる人はたくさんいるわけではないと最初から思っていた方がいい。
- ・ やりたいことをやらせていただいた 18 年だったと思うが、この私でも最初に言葉を発するときのためらいはある。学童保育やトレーラーハウス、道の駅を作ろう。と言ってしまったら、後には引き返せない。覆水盆に返らず。
- ・ 今後は自分も住める集合住宅を作って老後を送りたいと考えている。岩滑の中に気に入っている土地があり、ある日その土地が売られていることを知った。これはご縁だと思い、なんとか入手しようとした。
- ・ 土地の持ち主の方も売りましようとなったところで、3 人の持ち主の方の内、1 人が今年の 1 月に亡くなってしまった。そのため今は待ちの状態だが、集合住宅は作りたいたいと思っている。お金の工面もあまり考えないままだが。(笑)
- ・ ためらいがあっても言葉を出して誰かに聞いてもらわないと、実現はしない。まずは言葉に出してみる。それが一歩だろう。

<グループ 4 からの質問>

➤ 「この人」について教えてほしい。

⇒「この人」とは・・・

- ①関心がない人：住民参加のワークショップを実施するときに、関心のない人をどう卓上に呼ぶのか。
- ②目的、利害が一致しない人：どうやって着地点を見つけて行くのか。
- ③キーパーソン：キーパーソンとはどんな人か。

★村上氏

- ・ 星野道夫さんはこれが正しい道というのは一つではないと言っている。
- ・ 童話の村秋まつりをやろうとなったとき、駐車場問題で来てほしくないと思う人もいただろう。また、彼岸花は戦友を悼むため植え始めた経緯があり、誰かに見てほしくてやってきたわけではないという背景があった。
- ・ それでも岩滑の地域の人たちからボイコットされては困るため、問題点を整理し、課題を克服してきた。
- ・ 駐車場については、広い駐車場とシャトルバスを用意することで解消するに至った。また、会場近くのいちご農園の方の駐車場を、有料駐車場として提供してもらうようになった。
- ・ トイレがなくて困ることについては、最寄りの無人駅に簡易トイレを設置するようになった。
- ・ 地域の方から苦情を受けずに、地域のすばらしさを地元の人にも理解してほしいと願っている。青森で育った自分は岩滑の景色の美しさに感動し、それを大切にしたいと思った。
- ・ キーパーソンは、自分のアンテナにひっかかる人。感性が響き合う方。行政マンの中でも、仕事としてだけでなく、共に一生懸命になっている人を探す。
- ・ 理事や幹事をしてくださっている方は、道すがら気安く声をかけてくれた。幹事さんは、誰にでも態度を変えずに分かりやすく話をしてくれる方。そういう方はどこにでもいる人材ではないと思っている。

★松下氏

- ・ 関心のない人は、組織のことに関心がない場合もある。だれでも得意であったり、関心のあることはある。いつか時間が経ち、何かつながるかもしれない。一人一人の思いをまず、受け止めること。判断はその人がする。我々がすることではない。
- ・ 一人一人の言っていることを大切にし、聞いた人が情報にする。
- ・ 決めつけないこと。今、うっとうしいから NPO などに関わりたくないと思ってきた人も、自分たちの楽しみ方としての文化活動などをすると、その出会いの積み重ねの中でつながるときが来るかもしれない。待つことも大切。
- ・ 関心のある受け皿を作り、その受け皿を発信すること。今は、一人一人が何かをしたいと思っても、その受け皿がない。もやもやしている。
- ・ 人は幾層にも重なり合っている。情報化社会の中で、自分の生活を成り立たせるために情報は必要。関心のない人はイコール繋がらない人ではない。
- ・ 利害関係は、いつか相乗効果を持てる関係になる可能性もある。どうしたら私たちが安心できる社会になるのか、という視点を持つ。
- ・ 利害関係は今までの既存のものさしでしかない。新しい時代を作ることは、今までに経験のない暮らしを作っていくこと。利害関係をいかに良い関係にするか。これは対話、協働の関係づくりが必須。慌てない。焦らないこと。
- ・ 自分も何度も経験した。足踏みしてもいい。いつか声がかかってくることもある。時代が転換しているからこそ、ものさしの当て方をこだわらない。もう一つの目を持つこと。

- ・ 昔、社協とサポートちたは対立をしていた。情報共有したいと言い続けて、ようやく良い関係を築き始めた所。良い関係から新しいモノが生み出されていく。
- ・ 個人の得のためではなく、社会の利益のためにどうしたらいいかと考えている。社会の公益のためにつながる事。
- ・ 私の経験では、キーパーソンは「次にこんなことをしたい」とよく夢を語っていた。互いの知恵を出し合い、やれることを実現してきた道のりだった。描く世界は一緒なのだから、体質の違いを認めながら、対話し協働していくこと。その中で繋がる人は必ずいる。

<グループ5からの質問>

- **地域の方達との継続的な関係をどう作って行くか。**
⇒イベントに向けた準備期間は交流も多くあるが、イベントがないときに、どうつながり続けるか。

★ 村上

◇地域が連携して進める見守り社会実験事業

- ・ 岩滑地区の方々とりんりんと社協と連携をして、日本生命財団から700万円の助成を受けて、「防災のまちづくりから安住のまちづくりへー地域が連携して進める見守り社会実験ー」事業を進めている。
- ・ その事業のため、岩滑コミュニティセンターで、月に2〜3回話し合いの場を設けている。そこでは、忌憚のない意見を遠慮なく言わせてもらいながら、社会の中で不偏化するにはどうしたらいいか知恵を絞っている。

◇「ごんのふるさと」まちづくり協議会

- ・ (秋まつりにはつながったものの、)道の駅について考えることを辞めてしまうと、これまで議論してきたエネルギーと時間が0になってしまう。どんな形にせよ、続けて行くことがなにかにつながると思い、継続的に話し合いの場を持っている。
- ・ 次回は、地域の酪農家で次世代の仕事を作り出そうと思っている方が協議会へ参加してくれることになった。新たな流れを生み出す可能性も継続の場を持つことで生まれる。

<グループ3からの質問>

- **現在世の中は住みづらい状況にある。これからわたしたちは何をすべきか。**

★松下氏

- ・ 私たちが小さかったころは、大家族が残っていた。家族の機能と人間関係の基礎を身につけることができた。

- ・ 家族がバラバラになり、単身世帯が増えて行くことで、いろいろな事件や事故につながっている。しかしもう一度大家族に戻ることはできない。
- ・ だからこそ、大家族に代わる共同体をどうやって作って行くのかが問われている。共生の場づくり（赤ちゃんからお年寄りまで誰が行ってもいい場）も一つ。地域を大家族に近いもう一つの共同体にしていく。その中で役割、出番があるような仕組みを、地域のみんなで作って行く。
- ・ 地域性を重視し、集まる人から話し合いを進めて行くこと。そこからはじまる。慌てないで進めてほしい。

<グループ6からの質問>

- 持続する団体づくりはどうやって作って行けばいいか。

★松下氏

- ・ 市民を代弁する中間支援組織が育ってほしい。どんな人材育成が必要なのかを共有していく。中間支援の機能を持つところが、研修をしていく。
- ・ これからは人材育成が核になる。住民主体のまちづくり、人材育成をどうしたらいいかとみなさんたちで話し合う機会を持ってほしい。それぞれの市町の核になる団体が集まって議論ができるといい。
- ・ これからの時代は、ボトムアップで進んで行く。現場から人材は育成される。
- ・ その上で、セクターの信頼を得ること。信頼と実践を残せば行政も一緒に協働できる。
- ・ 厚生労働省の地域支え合い体制づくり事業費がまだ残っている。9月21日締切。愛知県は追加募集中なので、市町村福祉担当に申し出てみてほしい。

<グループ2>

- 団体内でのミッションの共有の方法を教えてほしい。
- また、村上さんの人にモノを頼むときの上手さの秘訣は？

★村上氏

- ・ まずその人を好きになること。あなたのことを好きと思って近づくと、つながる。表面だけでなく、本当に心からそう思って近づくこと。
- ・ 組織が大きくなってくると、なにもないところから始めたスタッフがいなくなり、クレーマーがあつて、パソコンがあることが当たり前と思う職員が増えてくる。その人たちにミッションを伝えるのは難しいこと。
- ・ 理事長を交代しようと思ったのは、65歳の節目だったからでもあるが、りんりんの事業性が強くなって行くと、私の役割がなくなっていくと感じていた。
- ・ 18年前に始めたことが、日々の職務の増加によって、本来やりたかったまちづくりや秋まつりに割く時間がなくなってしまっていた。
- ・ それでも秋まつりに深く関わり、りんりんとしても忙しい合間を縫って取り組むことを決めた。やり

たいことは介護保険事業だったわけではないことを伝えるために、介護保険事業以外のところで、楽しめる場を提供したいと思っている。

- ・ りんりんが秋まつりでうどんを提供するのは10日ほど。なんとかなると思っている。やると決まると、人を見つけて声をかけていく。楽しんで参加してくれる人を探しながらりんりんが目指しているものを体験してほしいと願っている。
- ・ 現場を担っている人に、こうした活動を担う余力はないと思う。だからこそ、私はしんどい顔をしていたらいけない。楽しいということを私自身が思い、表現し、そうやってやれたらいいと思っている。

★松下氏

- ・ 団体のミッションは変わらないが、現場の動きは変わっている。現場の中で小さくても達成感を持つように。現場の声を大事にするなど、新しい風を吹き込んで行く。同じところにいつまでもいると意欲も下がってしまう。社会が変化して動いている中で仕事づくりをどう新しくしていくかが、団体の継続性の鍵となる。
- ・ また、一人一人が自分の人生を考え、振り返ること。私は自分の人生を逆算して生きている。この期間自分はなにができるか。一人ではなにもできないが、仲間と役割で自ら考えて行ってほしい。そうすれば温度差があっても持続的なものとなるのではないか。

以上